

第25回 文学館演習 ―日本近代文学資料の探索と処理―

2023年度 講義概要

2023年8月22日(火)～8月26日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

中島国彦（館理事長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

紅野謙介（日本大学特任教授）

文学館の歴史をふりかえるとともに、所蔵資料はどのように集められたのか、その成り立ちと構成について解説する。夏目漱石や森鷗外など、個々の作家の原稿や初版本はむろんだが、そうした優れた才能の出現だけで「文学」が生み出されるわけではない。有名無名、さまざまな書き手が現れ、多くの出版物が刊行され、たくさんの読者が登場して、初めて「文学」の生産と享受のサイクルが回り出した。雑誌や叢書、さまざまな読者や愛好家、研究者のコレクションなど、「文学の生態系」を紹介していく。

資料の

声を聞く―

2017年 開館50年

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO

153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

(駒場公園内)

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>



2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料

渡部麻実（日本女子大学教授）

近代文学の資料には、活字化された資料と手書き資料という、二つの形がある。後者には、創作メモ・ノート、草稿、活字化されたテキストへの書き込み、書簡、日記といった自筆資料が含まれる。自筆資料に目を向けること、あるいは、自筆資料と活字化された資料とを見比べることで、新たに何がみえてくるのだろうか。堀辰雄を中心とする近代作家が遺した資料をひもときながら、文学研究における自筆資料の分析方法と可能性について考える。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 図書

須田喜次次（大妻女子大学名誉教授）

近年はインターネット上での配信という例も出てきましたが、基本的に文学作品は、新聞・雑誌・図書といった〈容れもの〉に入れられて、読者の元に届けられます。作品はそうした〈容れもの〉と無関係に存在するわけではありません。今回は、そのうち図書という〈容れもの〉について考えてみたいと思います。具体的には森鷗外『即興詩人』を素材とします。

図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。（スリッパ持参ください）

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌

大原祐治（千葉大学教授）

いわゆる文芸誌のみならず、総合誌や各種専門誌など、さまざまな雑誌のなかに文芸欄が設けられきたことからわかるように、近代文学の歴史と雑誌は深く関わっている。雑誌を刊行した出版社および編集者が果たした役割について考えることは、文学研究における重要な課題である。作家志望者や新進作家たちが自ら刊行した同人雑誌の存在と、そこで形成される人的ネットワークの問題も見逃せない。雑誌に注目し、資料として活用することで、どのような研究が可能になるのか。具体的な事例を紹介しながら考えたい。

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館の挿絵・写真資料は出版物やテレビ番組などで広く利用されています。その整理・保存方法について、写真利用カードを作りながら学んでみましょう。

④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞

山田俊治（横浜市立大学名誉教授）

近代社会に固有の文学形式である小説は、どのように成立したのであるか。その成立に当たり、近代社会の主要なマスメディアであった新聞が果たした役割は、無視することができない。新聞が小説を復活させる原動力となり、新たな出版形態と結びついて流行現象となったのである。そうした過程を、文学館所蔵の草双紙類を具体的に参照しながら、『小説神髓』によって小説が言語芸術となるまでの時代について考えてみようと思う。

肉筆資料の解説（実習）

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

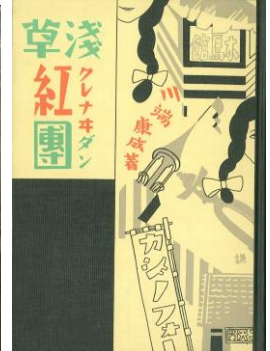
3. 文学をめぐる問題

①海外における日本文学の研究（講義・演習）
和田博文（東京女子大学教授）

海外の研究者との国際的共同研究は、ここ20年ほどの間に活性化してきた。21世紀初頭からのヨーロッパや東アジアの研究者との共同研究に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。東京女子大学比較文化研究所と上海外国語大学日本研究センターの研究所協定と国際共同研究についても紹介する。

②文学と大衆（講義・演習）
宮内淳子（近代文学研究者）

「大衆」が示す意味は広い。ここでは1920年代と1950年代の2つの時期に絞り「大衆」と文学との結びつきを、本館に収蔵された書籍や雑誌を紹介しながら考えたい。1920年代は教育の普及や出版事業の拡大等による読者層の広がりが、雑誌や全集の刊行となって表れた。戦後になるとマスコミの拡大と視聴覚文化の隆盛のもと、「大衆」は受け手にとどまらず発信者となり、活字メディアのあり方も変えていく。1950年代ではその変化を、サークル誌の紹介や、雑誌メディアと文壇の関わり等から見ていく。



4. 文学の周辺(1)

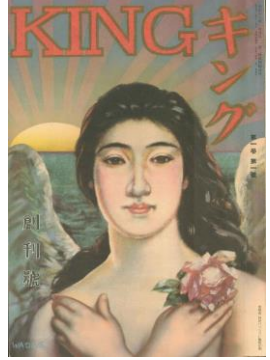
①文学と映画（講義・演習）
石田仁志（東洋大学教授）

1910年代以降の日本の小説と映画との結びつきについて考えていきたい。19世紀末からの映画の発展は人間に新しい視覚体験を与えたといえるが、20世紀になってアヴァンギャルド芸術運動の展開とも相まって、様々な新しい表象へと結びついている。映画の表現を意識した新しい小説の実験の一端を、文学テキストと映画の両面から検討する。なお、戦後における文学と映画との相互関係まで話を展開できればよいと思っている。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）
五味淵典嗣（早稲田大学教授）

日中戦争・アジア太平洋戦争期の文学表現を検討する上で、言説の検閲や統制というファクターを考慮することは不可欠である。この授業では、中央公論社と改造社の事例を中心に、戦時体制下の著作者や出版社が検閲や統制の枠組みとどう向きあったか、表現の現場にどんな力が作用していたのか、具体的な資料に即して検討したい。合わせて、検閲や統制を意識した研究を行う上で参照できる資料や、考慮すべきことがら等について解説する。



5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

②資料の公開・展示／図録（実習）

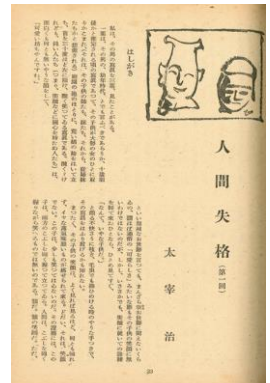
文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。



6. 文学の周辺(2)

①書画と文学（講義・演習）
伊藤一郎（東海大学名誉教授）

本授業では、文学と絵画との関係について、二つの角度から論じる予定である。一つは、言語芸術である文学と視覚芸術である絵画との表現の違いを、絵画から刺激を受けて書かれた芥川龍之介の小説「枯野抄」「秋山図」などを例に論じる。次に、文学と絵画が融合した東洋的表現について、近代小説家における近世文人趣味の系譜という観点から、おもに芥川自筆の書道・俳画を例にして論じる。



②文学と美術・音楽（講義・演習）
中島国彦（館理事長）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、永井荷風を取り上げ、文学作品が美術や音楽とどう絡まるのかを考えていきたい。荷風が親しんだ西洋芸術（絵画や音楽など）や日本の伝統芸術を跡付けることは、この問題を考える格好の材料となっている。実際の美術作品の画像や関連音源を利用しながら説明し、あわせて、同時代の芸術家とのつながり、芸術環境についても紹介したい。